

### 1 自己評価及び外部評価結果

**【事業所概要(事業所記入)】**

事業所番号	2372300752		
法人名	有限会社たつみ		
事業所名	グループホーム悠遊荘		
所在地	瀬戸市品野町8丁目221-1		
自己評価作成日	平成28年11月21日	評価結果市町村受理日	平成28年12月26日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	<a href="http://www.kaijokensaku.jp/23/index.php?action=kouhyou_detail_2016_022_kani=true&amp;JiyosvoCd=2372300752-00&amp;PrefCd=23&amp;VersionCd=022">http://www.kaijokensaku.jp/23/index.php?action=kouhyou_detail_2016_022_kani=true&amp;JiyosvoCd=2372300752-00&amp;PrefCd=23&amp;VersionCd=022</a>
----------	---

**【評価機関概要(評価機関記入)】**

評価機関名	株式会社 中部評価センター		
所在地	愛知県名古屋市長区左京山104番地 加福ビル左京山1F		
訪問調査日	平成28年12月10日		

**【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】**

瀬戸市のはずれで場所は静かですが敷地内に畑もあり、利用者の方と季節の野菜を作っています。リビングからは山の景色もよく見え季節の変わりも楽しんでます。玄関の前には階段もあり下肢筋力の運動も天気の良いときは、個別ケアで一人一人の方の体調にに合わせて行っています。ほぼ毎月定期来荘の音楽療法のボランティア、近隣のボランティアの方も気軽に来荘してくれます。昨年4月2つ目の施設ができ、職員も分かれてしまいましたが、この1年半で職員も定着し1名退職で利用者の方とも良い関係保っています。利用者の方の笑顔が一日の中でたくさん見られるよう職員も頑張っています、散歩コースもありドライブなど外に出る機会も多く持っています、

**【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】**

約1年半ほど前、法人の2つ目のホーム開設に伴った人事異動があり、現管理者が内部昇格して管理者に着任した。着任当初は混乱や戸惑いを禁じ得なかった管理者ではあるが、現在では安定した職員雇用に裏打ちされた落ち着いたホーム運営を行っている。利用者は穏やかな暮らしぶりであり、家族アンケートの結果も良好であった。  
10組を超えるボランティアグループが、入れ代わり立ち代わりホームを訪れて利用者を楽しませている。ホームの夏祭りにもボランティアグループ(マジックショー等)を呼んだが、地域に案内したために50名近い来場者があり、会場のホールは満員御礼の盛況ぶりであった。  
前管理者が始めた「メモリーブック」(利用者個々の歴史のアルバム)に、継続して取り組んでいる。

**V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します**

項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印	項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印
56 職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○ 1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらい 3. 利用者の1/3くらい 4. ほとんど掴んでいない	63 職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○ 1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57 利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○ 1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64 通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○ 1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58 利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65 運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○ 1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くいない
59 利用者は、職員が支援することで生き生きした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66 職員は、生き活きと働けている (参考項目:11,12)	○ 1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60 利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67 職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61 利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68 職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62 利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らせている (参考項目:28)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない		

# 自己評価および外部評価結果

[セル内の改行は、(Altキー) + (Enterキー)です。]

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>I. 理念に基づく運営</b>					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	事業所に理念を掲げ、会議の時に職員同士で確認している。	管理者の交替はあったが、「普通の家で生活し、楽しい人生を送る」とのホーム理念は変更せず、理念に忠実な支援を実践している。この一年、職員の異動はほとんどなく、理念は周知・理解されている。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	地域のイベントに積極的に参加したり、荘の行事にも地域の方に参加して頂き、交流に繋げている。	回覧板で地域の行事を確認し、利用者を積極的に参加させている。一方、ホームを訪れるボランティアグループも多く、地域に案内した夏祭りのマジックショーには、50名近い地域住民が来場した。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	散歩時や荘での行事の時に、利用者を変えて、コミュニケーションを取ることで認知症の理解を深めている。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	会議では活動報告や質疑応答の時間を設け、分かりやすく丁寧に答え、様々な意見を頂き、前向きに取り組んでいる。	利用者・家族、市・担当課職員、地域包括支援センター職員、町内会長、民生委員等が集まり、毎偶数月に運営推進会議を開催している。ホームから各種の報告をした後で、目標達成計画の進捗度を評価している。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	市役所・地域包括センターには利用者と一緒に出掛けたり、相談等もできる良好な関係づくりに努めている。	市の担当者と地域包括支援センター職員が、毎回運営推進会議に参加しており、ホームの状況は行政に理解されている。市から研修案内があった時には、職員の積極的な参加がある。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者及び全ての職員が「指定地域密着型サービス指定基準及び指定地域密着型介護予防サービス指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	身体拘束についてのマニュアルを職員全員が熟読している。	各種の研修や勉強会を通して、職員は身体拘束のないケアの重要性を十分に理解している。職員の勤続年数が長くなってはいるが、馴れ馴れしさもなく、不適切な言葉(スピーチロック)を聞くこともなかった。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	関係書類を職員全員が熟読し、認識している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	成年後見制度に関するマニュアルはいつでも閲覧できるようになっているが、話し合いの場を設けていきたい。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約また改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約時に丁寧に説明をし、同意を得ている。契約後の変更は文章で渡し、口頭でも伝えている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	来荘時、家族会や運営推進会議ではもちろん意見や要望を常に聞き、前向きに取り組んでいる。	不定期発行の「えがおだより」は、ホーム内外での利用者の様子を写真で伝えている。遠方の京都からも毎月家族が来訪し、利用者の様子だけでなく、記録類を閲覧して帰る。家族アンケートの結果は良好であった。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	基本管理者が職員に意見や提案を聞き、まとめた意見を代表者に伝え、会議等で発表してもらっている。	管理者の交替があったが、新管理者と苦楽を共にしてきた職員が多く、職員は気さくに管理者に話しかけている。職員雇用は安定しており、運営推進会議に毎回出席する市の担当者が名前を覚えるほどである。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	職員からの要望はできる限り沿うように代表者は努力している。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	内部研修以外にも職員に研修やセミナーに参加できるように努め、研修内容を報告し、共有し合っている。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	他のグループホームに見学や研修に行く機会を設け、意見交換を行い、事業所の質の向上に繋げている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援</b>					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	入所前に本人や家族と面談し、意向・要望など十分に聞いて常に本人や家族の目線を意識し、信頼関係に繋げている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	面談を通じて、家族の方の不安に思っている事や困っている事などを十分に受け止め、信頼関係づくりに努めている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	本人・家族のニーズの把握をし、そのニーズに応じるために、どのような支援が必要なのか見極め、より良いサービス提案に努めている。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	家事などを職員と一緒にやり、出来ることは任せ、出来ないことはさりげなく支援し、メリハリのある良好な関係づくりに努めている。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	来荘時に介護記録に目を通してもらい、荘での生活状況を伝えている。荘での行事(誕生日会等)に気軽に参加してもらえるように声をかけている。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	本人の馴染みの場所(商店街等)に出掛け、顔なじみの方との交流ができるように支援している。	10組を超えるボランティアグループが、入れ代わり立ち代わりホームを訪れている。ボランティアと利用者との馴染みの関係ができ、バンド演奏のボランティアは、演奏後に利用者と「おやつ」を楽しんでいる。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	利用者同士が会話ができるような雰囲気づくりや職員との一対一の会話を通し、一人一人に目を向けた支援をしている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	本人が退所されてからも面会に行き、家族の方の相談や支援に応じている。		
<b>Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント</b>					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	利用者一人一人が思い思いに生活できるように、一人一人の思いを尊重・傾聴するように努めている。	支援の中で掴んだ利用者の思いや意向は、「介護日誌」中の「ケアプラン記録」の欄に記録されている。「鰻が食べたい」、「ピザが食べたい」との思いが発展し、認知症カフェを開催する計画も持ち上がった。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	利用者本人や家族の方からの話をもとに、生活歴や生活環境を把握し、馴染みの場所にも出掛けている。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	利用者一人一人の生活パターンやその日の健康状態に合わせ、出来ることを無理なく続けてもらっている。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	利用者本人・家族の思いを聞き入れ、話し合い、介護計画に取り入れている。月一度のモニタリングで意見交換をしている。	介護計画書第1表の「本人の意向」欄が記述されていないものが散見された。しかし、介護計画書第2表には、「家事を手伝いたい」等の意向を踏まえた介護計画が作成されていた。	介護計画の見直し時には、「介護日誌」中の「ケアプラン記録」欄に書き溜められた利用者の思いや意向を集約し、介護計画書第1表の「本人の意向」欄に記述することが望まれる。
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	利用者一人一人のケアプランをもとに声かけをし、日々の実践状況を介護記録に記入・情報共有し、見直しに活かしている。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	本人や家族の状況を見ながら、その時々状況・ニーズに合わせたサービス提供ができるように柔軟な姿勢で取り組んでいる。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	小学校の運動会に参加したり、地域住民によるボランティア、中学生・高校生・看護学生による交流など地域の繋がりを楽しみ、支援している。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	主治医による月一回の往診を行い、入所前からのかかりつけ医への希望者への支援をし、適切な医療機関への受診の支援を行っている。	利用者全員がホーム協力医をかかりつけ医とし、毎月の往診を受けている。他科受診は家族対応となるが、家族の都合や事情によっては、職員が対応している。訪問歯科と口腔ケアの導入が検討されている。	歯の具合の良し悪しが、利用者の健康に影響を及ぼすことは自明の理であり、家族の意見にも配慮し、口腔ケアに前向きに取り組むことを期待したい。
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	週一回の訪問看護ステーションの利用、24時間の連絡体制など利用者に適切な受診や助言をもらい、支援している。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入院中は家族と連絡を取り、医療関係者との情報交換に努めている。又、主治医より紹介状を作成してもらい、情報交換が出来る体制を取っている。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	契約時にホームで出来る事を説明し、同意を得ている。家族・主治医・看護師と情報を共有し、話し合いながら終末ケアを行っている。	ほとんどの利用者・家族がホームでの看取りを希望しており、ホームもその意向に応じている。今年度も既に1件のホームでの看取りを経験した。利用者の穏やかな最期に、家族からは感謝の言葉が伝えられた。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	緊急時対応マニュアルを事務所内に掲示し、すぐに対応できるようにしている。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	事務所内に避難場所を掲示し、災害など想定し、避難訓練を行っている。消火器設置場所などを職員全員が周知している。	2ヶ月に1度の防災訓練を実施しており、その内の2回は消防署と連携しての通報訓練を含んでいる。ただし、夜間を想定した避難訓練の実施がない。	夜間の災害発生時には、地域の応援・協力が不可欠である。運営推進会議での議題として取り上げ、地域との適切な連携体制を構築することが望まれる。

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援</b>					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	一人一人の声に耳を傾け、思いを感じ、共感する言葉かけや対応に努めている。	利用者の落ち着きがない時、帰宅願望が出た時等、利用者の心を納めるために丁寧な傾聴と話しかけを行っている。つじつまが合わない利用者の話にも、尊厳に配慮して否定せずに傾聴している。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	日々のコミュニケーションにより、本人の思いや希望を受け止め、自己決定できるよう寄り添い、支援している。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	一人一人の体調に配慮し、有意義な一日をすごせるよう希望に沿った支援をしている。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	清潔な身だしなみを心掛け、出来る方には声かけにて、出来ない方は介助にて支援している。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	食事を楽しみにされており、下ごしらえ・味見・食器拭きなどを一緒に行い、食事を共にやっている。	介護計画に、家事手伝いや味見が入っている。庭に造られた菜園には、冬野菜の大根やネギ、ホウレンソウ、摘み菜等が育っており、人参やサニーレタスも芽吹いていた。いずれ、これらが食卓を彩ることとなる。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	一人一人の咀嚼、嚥下機能に配慮した栄養バランスの摂れた食事を心掛け、水分量の確保に気を配り提供している。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	毎食後、声かけ・見守り・介助を行い、磨き残しや口腔内の状態を観察し、清潔保持に努めている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	利用者個人の排便・排尿パターンを理解し、尿便汚染防止に努めている。	利用者の入れ替わりがあつて(要介護4、5はいない)、利用者の排泄自立度は向上した。リハビリパンツの着用者が多く、トイレでの排泄を基本としている。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	運動や水分補給を促し、便秘予防に努めている。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めず、個々にそった支援をしている	リラックスして入浴出来るように声かけしている。利用者の好きな話題を提供している。	週に3日(月、水、金曜日)の入浴機会がある。異性介助の問題はないが、入浴を好まない利用者はいらぬ。家族から対処法のアドバイスをもらい、週に1日の入浴は確保している。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	個々の生活スタイルを把握して、居室で休んでもらうなどしてもらっている。寝つけない方は話し相手になり、安心してもらうように支援している。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	薬の副作用など、スタッフ同士で薬の作用を把握し、変化があれば薬係に報告している。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	ドライブや買い物などの外出によって気分転換できるように支援している。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそつて、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	畑仕事・日光浴・散歩など積極的に外出支援している。	天候と利用者の体調を考慮し、積極的な外出支援を行っている。帰宅願望のある利用者には、畑(庭の菜園)に誘い出して気を鎮めてもらっている。散歩の途中で喫茶店によつたり、季節の花(桜、コスモス、紅葉等)を求めてドライブしたりしている。	



自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	小遣いは事務所で管理し、外出時は伝えるようにしている。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	電話をかける要望はないが、手紙や贈り物など利用者が管理できないような物は事務所で管理している。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	季節のカレンダーを作成し、季節感を感じられるように支援している。	広く掃除の行き届いた共用空間(ホール)は、居間(リビング)と食堂(ダイニング)とに2分されている。ホールのカーテンを開けると、紅葉に染まった山並みを間近に見ることができる。ホールでは、毎日「カメさん体操」が実施されている。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	ソファで利用者同士コミュニケーションが取れるように配慮があり、利用者がくつろげる環境にある。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	居室には昔の写真が貼ってあり、自分の家らしい生活が出来ている。	100歳に近い女性利用者は、居室に仏壇を据えて毎日水を供えている。居室の壁には、孫やひ孫の写真が飾られ、一分の隙もないほどである。各居室には洗面台が設置され、自力で歯磨きをする利用者もいる。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	利用者が分かりやすいように、トイレや居室に表札があり、混乱することがないようにしている。		